

日本の財を護る、 活かす。

文化財の新たな命を呼び覚ます建築の技



(提供：森トラスト株)



私たちは日頃日本の至宝ともいえる文化財にどれほど関心を注いでいるだろうか。伝統的な建築物や受け継がれた風俗に触れた時の感動。直し、護り、再現するという能動的な行為がなければこうした文化は伝承されることはなかったはずだ。

日本が有する文化財は1950年に施行された法律、文化財保護法によってその永続性が約束されている。建設業界もものづくりの技術と知見をもって文化財の修復、復元に力を尽くしてきた。なかでも建造物については改修事業には時代に即した戦略的、体系的な視点が必要だ。その事業を成功に導く新たな視点と技術にスポットを当てる。

(提供：森トラスト株)



(提供：和泉市)

(提供：和泉市)

地域の文化財を法律で護る

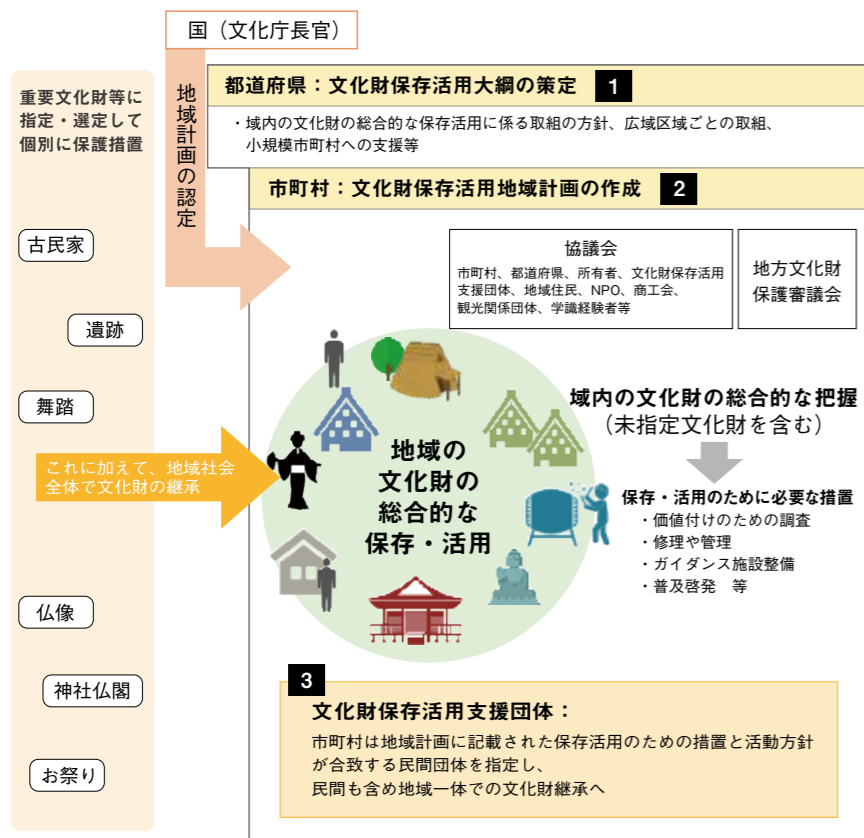
一九五〇年の文化財保護法制定の契機となったのは、前年の法隆寺金堂の火災だった。この火災により金堂の壁画が焼損し、文化財保護の重要性が社会的に再認識されたことから、これらを保存するための総合的な法律として制定された。国はこの法律に基づき歴史的に貴重な事物を指定・選定・登録し、現状の変更などに対して一定の制限を課すこととした。その一方で、保存修理や防災施設の設置、文化財の公有化などに対しては国庫補助などの支援を行うことにより、その「保存」に力を尽くしてきた。文化財の所有者には税制の優遇措置も整備されている。同時に、公開施設の整備、鑑賞機会の創出といった「活用」についても様々な措置を講じている。

一言に文化財と言ってもその種類は多様だ。文化財保護法では文化財を有形文化財、無形文化財、民俗文化財、記念物、文化的景観、伝統的建造物群の六つに定義し、重要なものを国として重点的に保護している。その数は時代の変遷や新発見、学術的な調査研究の進展などに応じて着実に増えつつあり、国が登録する登録有形文化財(建造物)だけでも一三、六〇〇件余という膨大な件数になる。

現在これら文化財の保存、活用が大きな岐路に立たされている。その背景には少子高齢化やひっ迫する行政の財政など社会的な課題がある。文化庁の山下信一郎文化財鑑査官はこう説明する。「例えば地域に受け継がれてきた祭事なども、少子高齢化や過疎化に伴い参加者が減少すると、それ自体が消滅する懸念があります。有形・無形の様々な文化財を、地域全体、つまり『地域総がかり』で継承に取り組んでいくことが重要だと強く認識しています」。

文化財の維持や補修といった管理業務は所有者や管理団体に指定された地方自治体などが担うことが文化財保護法で定められている。国は技術的、財政的な支援を行うが、文化財保護の主体はあくまで地方や地域になる。こうした喫緊の課題に対して国の文化審議会が議論がなされ、地方自治体による計画

地域における文化財の総合的な保存・活用



見が求められますから、所有者がゼネコンと連携して計画立案や申請などのマネジメント業務を遂行することは必然とも言えるでしょう。特に近現代の建築では計画立案時から建設会社の力をお借りするシーンは増えている傾向にあります。文化財建築物の耐震性能や利便性向上を目的とした改修を設計、施工面から担うのは建設業界だ。所有者

の意図を深く理解し、知見と技術をもって計画の策定段階から建設業界が関与することが今まで以上に求められるようになるだろう。五島調査官もこう話す。「計画の立案は所有者や管理団体が主導することになります。文化財保存活用支援団体の画を担っていただくことも今後あり得るかもしれません。建物を見極

めるノウハウを持っている建設業界には大きな可能性がある。積極的な参画に期待しています」。文化庁には文化財の持続可能な保存を目的として、国立の文化財修理センター(仮)を設立する構想がある。この組織を旗艦として文化財を修復する道具や原材料の確保、技術を継承するための一体的な体制整備を目指す。そうした面においても建設業界が果たすべき役割は小さくない。「文化財修理は可能な限り古材を残すことが大前提です。ところが梁などに使われている湾曲した松の根曲がり材などは、それ自体が今や流通していません。古材の傷みが大きい部分にカーボンを巻いて靱性を確保するといった方法も採用していますが、修復技術の開発や材料の確保、再現においても建設業界が関与する余地は大きいと思います」と稲垣調査官は話す。東大寺の大仏殿の屋根には明治期の補修事業で当時としては先駆的だった鉄骨トラスが用いられていることに触れ、こう言葉を継いだ。「文化財の修復は、過去に施された修理の痕跡も尊重しながら行われていま

文化財の計画的な保存と活用を推進していただくことが改正の趣旨です」。国は計画の立案や申請手続きに関して詳細な指針やマニュアルを整備し、幾度となくアップデートしてきた。「文化財をどこまで直し残すべきなのか、どう生かしていくのか、計画で詳細に定めておけば現状変更などの手続きを弾力的に運用することができ、これは所有者にもメリットになります」と五島調査官は話す。改正文化財保護法が機能する前提となるのは、都道府県の大綱、市町村の保存活用地域計画と、これを踏まえた個別の保存活用計画といった地域全体を俯瞰する取り組みだ。新たなスキームによって計画の実現性、合理性が地域、保存、活用というキーワードでより明確に示されている。

文化財の体系図



文化庁 文化財鑑査官 山下 信一郎 Shinichiro Yamashita

文化資源活用課の五島昌也主任文化財調査官はその意義についてこう語る。「文化財の保存や活用に関わる保存活用計画が、文化財保護法の改正時に初めて条文に明記されました。地域が主体となって文

文化財保護に建設業界の力を文化財建築物の個別の保存活用計画においては、策定段階から建設会社に関わる事例がこれまでもあったと語るのは稲垣智也調査官だ。「建築物の修理には専門的な知

的な保存活用の推進を目的として二〇一八年六月に文化財保護法が改正された。

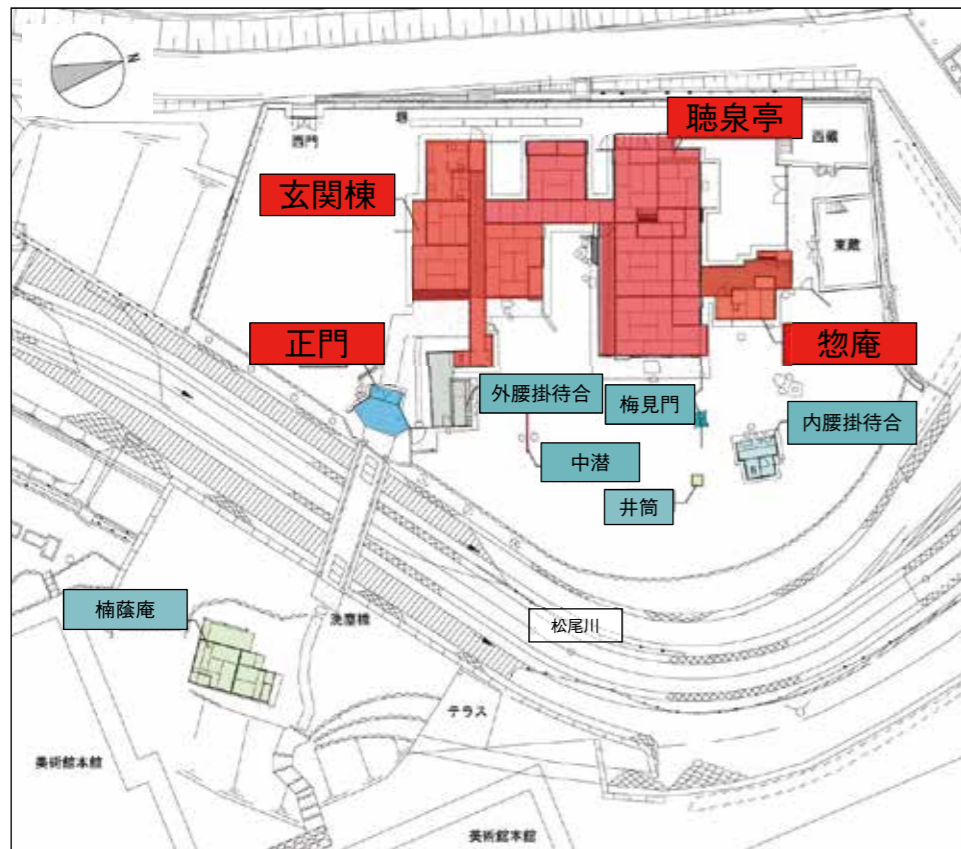
「地域総がかり」を後押しする

改正文化財保護法は、「保存」という視点に加えて「活用」といった側面を重視する内容となっている。改正法の施行により都道府県は文化財の保存、活用に関する総合的な施策の大綱を定めることができるようになった。市町村はこの大綱を勘案して策定した総合的な計画である「文化財保存活用地域計画」について、国に向けて認定を申

請することが可能となり、また、地域内における文化財所有者の相談に対応するために民間団体などを「文化財保存活用支援団体」として指定することもできる。更に保存活用制度も見直され、国指定などの文化財の所有者や管理団体は「保存活用計画」を策定し、国へ認定を申請できるよう変更された。また、その都度国の許可が必要だった国指定などの文化財の現状変更は、認定された保存活用計画に記載された範疇において届出制とするなど手続が弾力化された。文化財保護の事務作業は地方自治体の教育委員会が所管していたが、条例により各地方自治体の首長が直接担当で

けるようになるなど、地方の自律性を尊重した仕組みになった。更に、地域に応じた調査研究を行うことで文化財を資源として積極的に活用し観光需要を喚起するなど、総合的な地域づくりの核の一つとして位置付けている。「地域総ぐるみ」で文化財の保存、活用に取り組むスキームを整理することで、国庫補助の活用も円滑になる。自治体としては活用に関わる規制が緩和され、事業者にとっても地域の活性化に伴うビジネスチャンスと捉えることができる。

文化財の計画的な保存と活用を推進していただくことが改正の趣旨です」。国は計画の立案や申請手続きに関して詳細な指針やマニュアルを整備し、幾度となくアップデートしてきた。「文化財をどこまで直し残すべきなのか、どう生かしていくのか、計画で詳細に定めておけば現状変更などの手続きを弾力的に運用することができ、これは所有者にもメリットになります」と五島調査官は話す。改正文化財保護法が機能する前提となるのは、都道府県の大綱、市町村の保存活用地域計画と、これを踏まえた個別の保存活用計画といった地域全体を俯瞰する取り組みだ。新たなスキームによって計画の実現性、合理性が地域、保存、活用というキーワードでより明確に示されている。



(提供：和泉市)



写真右手が久保家の邸宅跡地に建設された久保惣記念美術館本館方面。この茶室エリアとは橋(洗濯橋)でつながれている。

着工に向け、文化財の保存や修理などに実績のある施工会社を対象とした厳正な入札が行われ、現地施工を(株)藤木工務店が担うことになった。工事監理を担う(株)文化財構造計画と和泉市建築住宅室、そして久保惣記念美術館を含む四者は二週間に一度定例会議を開催し、施工手順の検討や工事の進捗など詳細な情報を共有している。「建設

文化財を まちづくりの手掛かりに

はそれを惜しむ声や再公開日の問い合わせが数多く寄せられているという。上仁総括主査は公開を中断して改めて気付いたことがあると明かす。「閉鎖したとたん、このお茶室が急に歳をとったように感じました。一般公開は建物のなかの空気を入れ替える機会になっていたのだと。そうしたことをよくご存知の設計、施工会社が丁寧な工事を通してお茶室を生き返らせてくださっています」。そのプロセスを美術館の職員もワクワクした心持ちで見守っているのだという。

亭、惣庵、正門の耐震補強が主になる。茶室や正門、玄関など構成要素が一体的に近代建築の手法で精緻に再現されていることに加え、民間人である実業家の手によって創建され、現在は地方公共団体である市

が所有、管理している点などが文化財に登録された根拠になっている。上仁理恵子総括主査(学芸員)はこう説明する。「茶室を所有する美術館はほかにもありますが、移築ではなく建設当初の場所です。市町村が運営、公開しているお茶室は非常に稀

です。当館としてもそうした点を重視して可能な限り公開の機会を設けてきました。今回の工事は更に安全に、安心してご覧いただけるようにすることが大きな目的です」。工事期間中は茶室の公開を二年ほど中断せざるを得ない。市民から

安心と安全を約束する 昭和の茶室

和泉市久保惣記念美術館

(提供：和泉市)

表千家の思想を写す茶室
二〇二二年九月、大阪府和泉市で国の登録有形文化財である木造建築物の耐震と保存を目的とした工事が始まった。昭和初期に建設された和泉市久保惣記念美術館の茶室だ。明治期から綿業で隆盛を誇った久保惣(株)の廃業に伴い三代久保惣太郎氏が代表者として収集した古美術品と土地、建物などを市に寄贈。その敷地で一九八二年に開館したのがこの美術館だ。国宝、重要文化財を含む約二二、〇〇〇点のコレクションを所蔵、公開している。現在施工中の茶室も同家から寄贈されたものだ。同館の田中ゆかり館長代理にこの茶室の来歴をお聞きした。「二代久保惣太郎氏によって一九三七年から四一年にかけて建てられた茶室です。表千家の茶室を忠実に再現、写していることなどが評価されて二〇〇六年に茶室、正門など一〇件が登録有形文化財建造物に、二〇二二年には茶室庭園も登録記念物となりました」。開館以来市民に親しまれてきた茶室は建設から約九〇年を経て老朽化が進み

耐震性に課題があったことから、市が二〇一八年三月に保存活用計画を立案し、これに則って第一期の耐震補強工事に着手したという。保存活用計画は立案時から文化庁、大阪府、有識者が関わり、各方面のサポートを得ながら策定された。予算は国の補助金や市費のほか、ガバメントクラウドファンディングなどで確保。第一期の工事は玄関棟、聴泉



和泉市
株式会社藤木工務店



美術館とホールは1999年にBCS賞を受賞している。(提供：和泉市)



地下に設けられた煉瓦の基礎部の施工を残し伝えることも考慮してRCの構造物を構築し、鉄筋と一体化させて茶室全体の耐震性能を強化する。



天井裏にプレース材を設置して建物がねじれる挙動に対応。白いロープでモデルをつくりプレース材の最適な設置ポイントを検証する。



茶室内にある4カ所の押し入れの内側に基礎を施し柱を立て、三面に格子パネルを設置する。これが耐震壁となり水平方向の揺れに対して抵抗する。

に添うようにRCの構造物を構築、隙間にグラウトを施し、鉄筋を打ち込んで一体化させ耐震性を担保することにした。「『保存』という範疇だと煉瓦壁にゴリゴリと穴をあけるようなことはできません。今回は『耐震補強』が目的ですから、そこは頭を切り替えて仕事をすることになります」。煉瓦壁と絶縁した新たな支持構造も考えられたが、佐々木統括は合理性とコストを鑑みて新旧の構造を融合させる選択肢を採ったという。

耐震性能を強化して安全な環境で多くの人に和風建築の魅力に触れてもらえるようにする。その意義と施工方針について現場を率いる野口義文所長はこう話す。「完工後はこの貴重な茶室を気軽に見ることが出来る。素晴らしいことだと思えます。建築を学ぶ学生や若い大工さんが訪れることも少なくありません。古材や当初の構造を継承することは重要ですが、現代の素材、工法を導入してでも将来に向けて残していく努力が求められることもあると思います」。佐々木統括は、完工後に発注者から「長い時間をかけて

当時の図面などの資料は極めて少なく、想定外の課題が発生することもあり。藤木工務店、文化財構造計画はそのたびに迅速かつ正確に回答してください。私も私としても勉強になっています。私と芸員も建築に関しては素人なので笑いながら話してくれた。上仁総括主査が藤木工務店に寄せる期待も大きい。「最初に工事統括が現地を見に来てくださった時の、構造や部材に向けた繊細な眼差しが印象的で安心感がありました。とても心強く思ったことを覚えています」。

和泉市はこの美術館を中心とした一帯を「美術館のあるまち」としてブランド化する「和泉・久保惣ミュージアムタウン構想」を推進している。更に、全国有数といわれる弥生時代の大規模環濠集落の史跡・池上曾根遺跡を核として地域の誇りと魅力を創出する「和泉・信太の森ヒストリータウン構想」も動き始めている。この茶室の再整備プロジェクトも和泉市の「まちづくり」に大きく寄与することは間違いのない。「今や子どもたちがおじいちゃん



保存小屋には正門の板戸や天井材など撤去した部材が保管されている。正門の柱には過去に接ぎ木で修理された形跡がある。今後腐敗や損傷の程度を検証してその接ぎ木を残すか、切断して新たな材料で接ぐか検討するという。



「文化財の修理はここ二〇年ぐらいいなくなってきました。根が好きやからね」。藤木工務店の佐々木信治工事統括は現場事務所でお話を伺う冒頭そう言うて笑った。入社当初は新築の仕事が多かったが、その後は文化財の保存プロジェクトや修理工事一筋で仕事をしてきた。プライベートでも若い頃から全国各地の文化財建築物や住宅を頻繁に訪ね歩いてきたという。藤木工務店もこうした遺産を長く後世に残すことを大きな使命の一つと位置付けて

んやおばあちゃんの家を訪ねてもそこは現代的な住宅やマンションで、和風建築に触れる機会は本当に少ないと思います。その貴重な場と機会がこの美術館、このまちにある。一日も早く皆さんに訪れていただけるよう完工に向けて取り組んでいきます」。田中館長代理は、再公開後は市民主催の茶会や着付けのイベントなどにも活用できる身近な文化財にしたいと抱負を話してくれた。

「想定外」を楽しむ

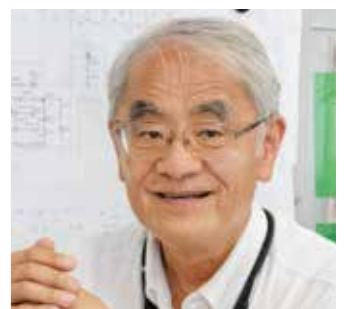
「想定外」を楽しむ

佐々木統括は、今回の茶室の施工については文化財の保存修理工事とは趣が違っていると話す。「今回はあくまで木造建築物の耐震性能を高める工事。どのようなプロセスを踏むことになるのかとても興味深い。私としては新しい引き出しが一つ増える」と期待しています。

茶室の地下空間に煉瓦壁がある。茶室を支持する基礎部だ。ある程度予測はできていたが、想定外のことはいくらでもあるという。その課題をどうやってクリアするかが面白いと佐々木統括は話す。取材時も、現場で見つけたスズメバチの巣を撤去する業者との打ち合わせがこの後控えていると幾分楽しそうに苦笑した。

煉瓦の基礎についてはこの壁体

株式会社藤木工務店
大阪本店・工事部
工事統括
佐々木 信治 Nobuharu Sasaki



株式会社藤木工務店
大阪本店・工事部
工事統括
佐々木 信治 Nobuharu Sasaki

唯一無二の文化財 ラグジュアリーホテル

万平ホテル

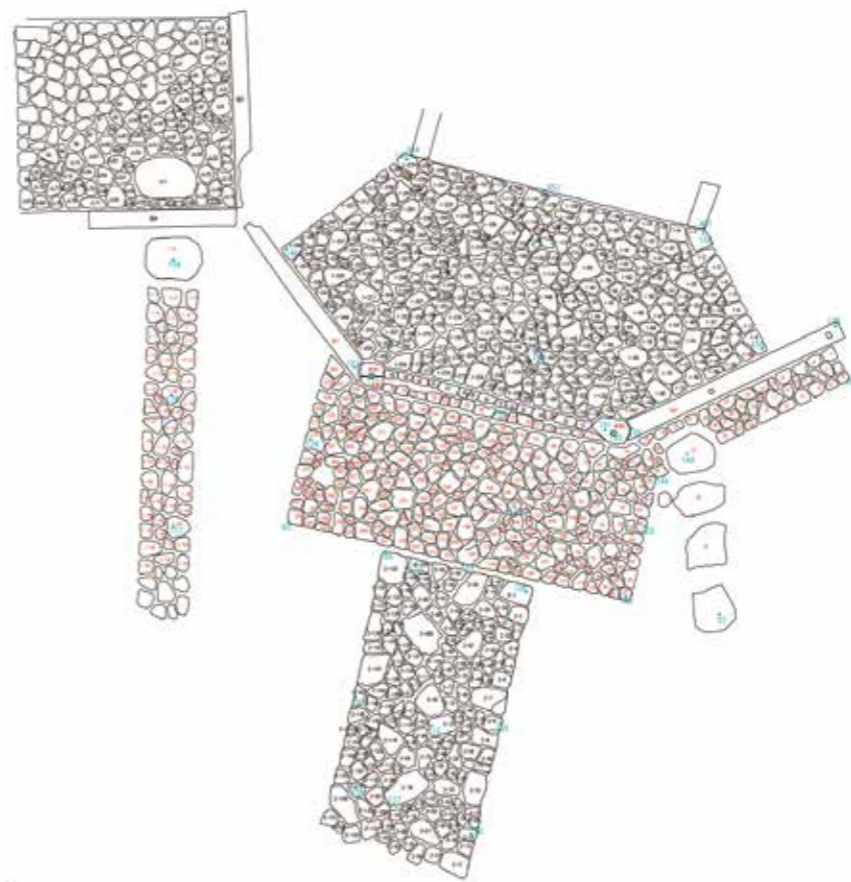
(提供：森トラスト(株))



森トラスト株式会社
清水建設株式会社



敷石測量図



すべての敷石にナンバリングをして撤去した。基礎を整備したあとに事前に記録した図面と照合して復旧する。
(提供：(株)藤木工務店)

一体どこを直したのか」と疑問を呈される仕事は理想だと話す。手を加えたことが判然としない出来栄えが身上了。一方であえて現状をそのまま残置するという考え方もあるという。「現時点において建築当時と同じ材料が存在しない。あるいは最適解としての工法が絞り込めないといった状況下では最低限の修理を施したうえで将来の技術に託す、

そうした発想が必要になることもあります。もちろん簡単に白旗を上げることはしませんけれど」。「ペテランの矜持を匂わせながらそう話してくれました。

記録を残す 現場で学ぶ

文化財の修復は極めて専門的な分野だけに技術者、技能者の確保が困難な状況にある。高齢化も顕著だ。工期は長ければ一〇年を超える長丁場になる。この道を志す担い手も減少するなか技術の継承は大きな課題だ。野口所長は継続的に記録を残すことが重要だと考えている。「仕事の経緯、材料や工法を可能な限り記録して残す。今回は3Dスキャナーで建物の点群データを採



株式会社藤木工務店
大阪本店・工務部
工事所長

野口 義文 Yoshifumi Noguchi

取しました。次世代の技術者たちの貴重な資料になるはずだ」。

技術の継承は現場でこそ可能になると話すのは佐々木統括だ。「知見やノウハウの蓄積は、現場でのOJTに勝るものはありません。この世界に入った当初は、何の予備知識も持ち合わせていなかった。現場の先輩や技能者に多くのことを教わりました。とても感謝しています」。その過程で培われ蓄積された知見を社内の勉強会や同業者を対象とした見学会などで伝えていかなければならない。同時に今後は国宝や明治、大正期の建築物の修復にも挑戦したいと意欲をにじませた。



民間主導の 文化財再生プロジェクト

二〇二三年一月四日、日本のクラシックホテルの草分けとして名高い軽井沢の万平ホテルが施設の大規模改修・改築事業のために一時休業期間に入った。国の登録有形文化財である「本館アルプス館」を中心に、経年劣化部分の補強、既存棟における新規客室の設置、新施設の増設を実施し、約一年半の工期で万平ホテルをよみがえらせる。

万平ホテルの創業は一八九四年。戦前、戦後を通じて国内外の著名



大正時代の万平ホテル。(提供：森トラスト(株))

人々や政財界人から愛され続けてきた。一九三六年に竣工したアルプス館はハーフトインバー風の外観を擁し、内外装に和洋折衷の意匠をふんだんに取り入れた木造三階建て。当時の先進的な構造や材料を採用し、日本の木造建築の近代化に挑んだ貴重な建築物として高く評価されている。

しかし老朽化は否めず、創業一三〇年記念事業の一環として今回の改修・改築事業に踏み切った。西川眞司支配人は心中をこう明かす。「お客様から独特の空間として親しまれてきましたが、運営の当事者としては動線やハード面で少なからず苦勞があり、サービスだけではカバーしきれない部分も正直ありました。今回の改修により、安全で快適な施設としてお客様をお迎



万平ホテル
支配人

西川 眞司 Shinji Nishikawa

「えできると期待しています」。時間に磨かれてきた伝統的な建築物も、その健全性と安全性があつて初めて良質なホスピタリティを提供することが可能になる。改修・改築事業の背景にはそうした万平ホテルの強い意志がある。

アルプス館は、法律に基づく耐震改修計画の認定を取得することで、建物安全性の向上を図るとともに、空調などを最新設備に置き換える。同時に、文化財としての現状の外観や意匠を最大限に生かすことを基本方針として掲げている。一九九七年より万平ホテルに経営参画している森トラスト(株)の澤木俊一 上席技師はこう話す。「建物の骨格や外装は昔ながらのものをしっかりと残しつつ、設備はインターナショナルな基準に沿ったものとします。民間事業として、これからのホテルに求められる商品性を確保しながら、文化財を活用していきます」。

「ここでしか出会えない体験に触れる」

日本各地の都市圏やリゾート地



森トラスト株式会社
不動産開発本部
コンストラクションマネジメント部
上席技師

澤木 俊一 Shunichi Sawaki

でインターナショナルホテルを展開する森トラストグループは、事業ビジョンとして「ラグジュアリー・デステイネーション・ネットワーク」の創造を掲げている。ヒルトン系、マリOTT系といったブランドと連携したホテル開発と万平ホテルは一見趣が異なるようにも思えるが、川崎美幸課長はこう説明する。「それぞれの地域特性を生かし、ここでしか出会えない体験を提供する唯一無二のホテルを全国に整備しようとするコンセプトです。そうした意味でも万平ホテルは事業ビジョンを象徴する施設の一つといえるでしょう」。

ホテルという名の文化財をこの時代と軽井沢というブランドに即した形で活用し続ける。そこに改修事業の大きな意義がある。森トラス



森トラストが2024年冬の開業を目指して開発中の長崎市南山手の「ホテルインディゴ長崎グランドストリート」。1898年にカトリック系女学校として建設された「旧マリア園」を高級ホテルとして再生する。立地エリアは国選定重要伝統的建物群地区に指定されており、長崎ならではの唯一無二の魅力に触れる旅の拠点となる。(提供：森トラスト(株))

トは万平ホテル以外にも長崎、奈良などで伝統的な建築物をホテルとして再生・活用するプロジェクトを進めている。伝統的な建築物は貴重な経営資源とも言える。

「ホテルは人なり」を体現できる建物に

川崎課長は万平ホテルの佇まい

「現場の所長さんが工程をパラパラ漫画のようにわかりやすくまとめた分厚い書類を持ってきて説明してください。単なる請負仕事ではなく、ご自身たちの責任でこの仕事を成し遂げようという気概が伝わってきました」。

改修工事の設計業務は(株)梓設計、現地施工を清水建設(株)が担う。川崎課長はキックオフミーティングの際のエピソードを話してくれた。

「現場の所長さんが工程をパラパラ漫画のようにわかりやすくまとめた分厚い書類を持ってきて説明してください。単なる請負仕事ではなく、ご自身たちの責任でこの仕事を成し遂げようという気概が伝わってきました」。

「現場の所長さんが工程をパラパラ漫画のようにわかりやすくまとめた分厚い書類を持ってきて説明してください。単なる請負仕事ではなく、ご自身たちの責任でこの仕事を成し遂げようという気概が伝わってきました」。

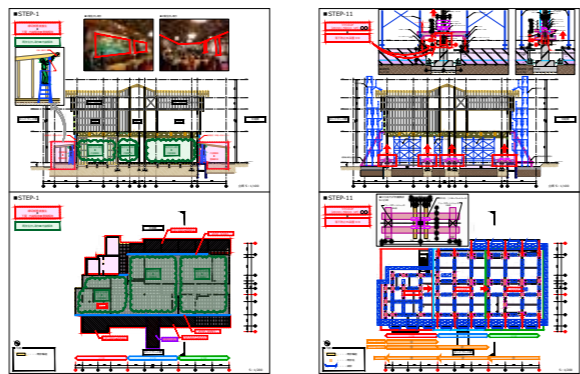


森トラスト株式会社
不動産開発本部 開発企画部 課長

川崎 美幸 Miyuki Kawasaki

から、西洋の様式と、信州古来の伝統的な様式を読み解き、融合させた技と志を感じるといふ。「この建物の佇まいには当時のホテル経営や建築の思想、哲学、息遣いが宿っています。当時の方達が、従前の旅館・ホテルというものの固定概念や価値観を超えて、未来を見据えた最先端を模索した結果が、今知られている形です。私たちもその気概を受け継ぎ、単に文化財を残すということにとどまらず、これからの万平ホテルにとって一番良いあり方は何なのか、どうしたらこのホテルの価値がより生かされるのか、様々な視点から検討し、改修に臨んでいます」と話す。

一方で文化財の改修は容易な事業ではない。今回は、アルプス館の改修とその周辺の建物の新築などの施工が輻輳するパズルのような現場だ。澤木上席技師はその難しさをこう話す。「改修工事は一度解体してみないとわからないことが多い。そのたびに設計者と施工者が我々の要望を真摯に受け止め対応してください。最適解を見出すのはとても難しいことですが、我々もプ



25ステップの平面図・断面図に色をつけてまとめた資料。重ねてめくっていくと工程がよくわかる。(提供：清水建設(株))

「現場の所長さんが工程をパラパラ漫画のようにわかりやすくまとめた分厚い書類を持ってきて説明してください。単なる請負仕事ではなく、ご自身たちの責任でこの仕事を成し遂げようという気概が伝わってきました」。

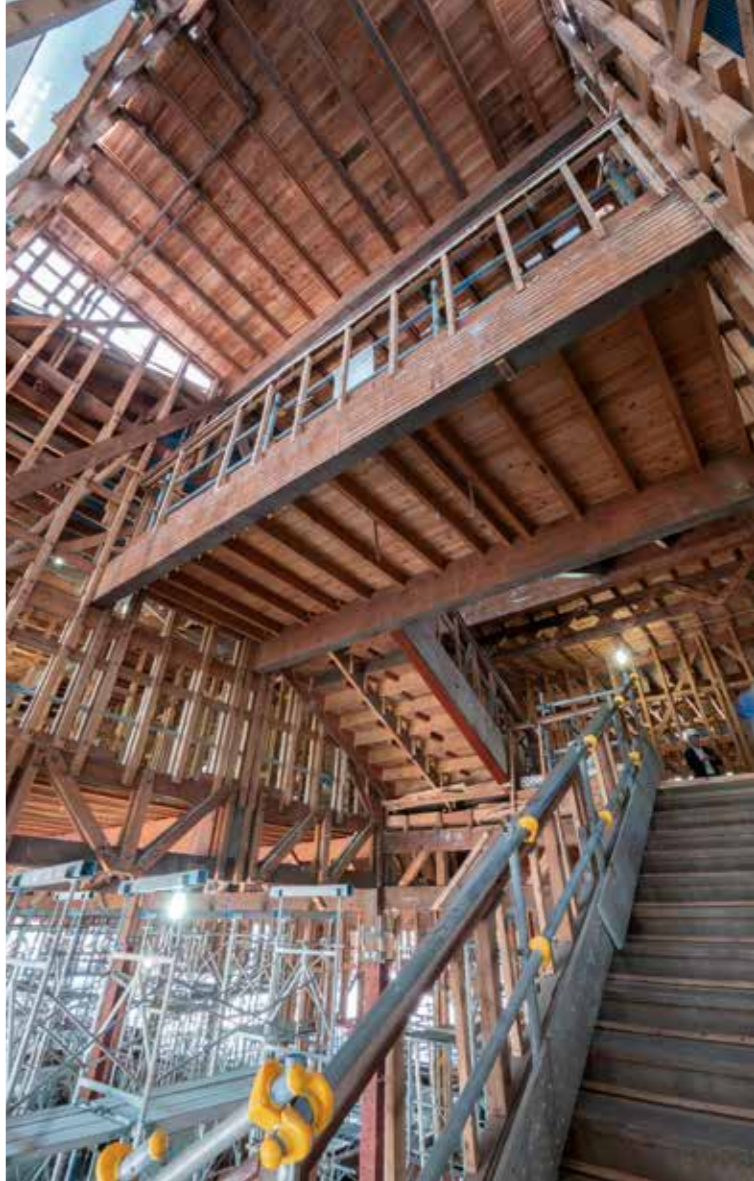
業界の慣習を疑ってかかる

現場の万平ホテルは内部の壁や天井が撤去され、取材時は四方をジャッキで持ち上げ、基礎部を再構築する工程だ。「今回は地盤改良を



左上／1936年のアルプス館。特徴的な外観は改修後も受け継がれていく。(提供：森トラスト(株)) 左下・右／アルプス館と隣接して新たな宿泊棟の新築工事が並走する。





左上・右／縦横に組まれた木材の骨組み。昭和初期の堅牢な木造建築物であることを改めて実感させる。左下／アルプス館の正面に繁茂する美しい植栽も現状のまま引き継がれていく。

含めすべての基礎をつくり変えま
す。建物を支える柱以外の部分に
堅固な地中梁と耐圧盤を構築し、
これに支持させて改めて柱をジャッ
キアップしたところです。今アルプ
ス館は宙に浮いている状態です」。
現場で指揮を執る清水建設の杉山
和弥工事が説明してくれた。すべ
ての基礎を構築した後、ジャッキダ
ウンして改めて修復の施工を継続
するという。建物全体を持ち上げる
「揚屋」の施工は高度な技術を有
する専門職に一式工事で委ねるこ
とが定石だが、今回は専門家と共
同で考案した工法を導入した。そ
の背景には杉山工事長の強い信条
がある。「建設業界には通説に囚わ
れがちな傾向があると常々感じて
います。揚屋にしても今の技術力
をもってすれば、慣習に則って専門



清水建設株式会社
東京支店 長野営業所
工事長

杉山 和弥 Kazuya Sugiyama

家を技術のみに依存することなく
数値に裏付けられた精緻な仕事
ができる。文化財を扱うには最適
な方法です」。

施工にあたっては、文化財の構造
体になるべく負荷をかけない手法
を検討し、建物の構成を分析するこ
とからスタートした。BIMによる
解析を行い、建物の質量やそのバラ
ンスを施工ステップそれぞれに対し
て社内技術スタッフと検証した。
「検討に基づき、当社の技術研究所
で実物大モデルを用いた実験を何
度も繰り返し、現在の方法を見つけ
出しました。結果、万平ホテルの特
徴にあった、最も文化財にストレス
が少ない方法を見出し、施工計画に
反映・実践することができたと思
えています」。

万平ホテルの現場では新技術の
進取の精神が遺憾なく発揮されて
いるという。保存が至上命題の重要
文化財とは異なり、活用を前提とし
た登録有形文化財の修復は工法の
許容範囲が広い。現代の素材や先端
的な技術を検討し、発注者に対し
ても導入・採用を積極的に提案し続
けているという。もちろん往時の構

建物と発注者の声を読み解く

造や意匠を最大限に保つことは大
前提になるとこう話す。「万平ホテ
ルには軽井沢という立地と歴史に
育まれたオーラがあります。再訪さ
れたお客様に、その威光をリニュー
アル前と同様に体感していただい
けるように仕上げなければなりません。
一方で、ホテルとして使われ続け
る施設です。長寿命化、メンテナ
ンス性も重視して現場を全うしま
す」。

発注者である森トラストとの協
議は日常的に行われている。文化財
修復の現場では想定外の事象が頻
出する。杉山工事長は清水建設本
社と協力会社、設計者をはじめ、関
係者と一丸となって対応に当たる。
「発注者・設計者はもちろんのこと、
支配人をはじめホテルスタッフの意
見も集約して見出された最適解を

建物と施工に反映させることが大
切だと思っています。図面に示さ
れているから、発注者の指示だけ
ら」というところで妥協せず、現場
目線で最良の解決策があればため
らうことなく上申する。受発注者間
にそうした空気ができています」と
話す。最初の工程説明で用意したパ
ラパラ漫画仕立ての資料も、発注者
に視覚的な理解を促し、より深いコ
ミュニケーションを取ろうと配慮し



上／BIMを駆使して構造を3D化し、材料と質量のデータを付与して最適な荷重を算出。柱を鋼材で締め上げ一体的にジャッキアップする揚屋の工法を新たに考案した。木材を傷めないように締め上げる最適なねじり力などを探るため同社の技術研究所で供試体を使った実験を何度も繰り返した。
下／ジャッキアップしたアルプス館を四方から鋼材で支える。

たものだ。言葉が流ちょうではない
のでと笑ったが、理解を越えた共感
が醸成されたことも確かだろう。
杉山工事長は、精度の高い解決策
を導き出すには建物と現場の状況
を見極め、発注者の要望を的確に
理解することが重要だという。「万
平ホテルには、昭和初期の竣工とは
いえ既に合理的な工法が数多く採
用されています。その意図を読み解
き、その合理性を理解したうえで私
たちが何を付与できるのかを検討し
ます」。発注者の要望にしても、森ト
ラストは緑を大切にしていると聞け
ばアルプス館正面の豊かな植栽付
近にメインの施工ヤードを設けるこ
とを回避した。そうしたニュアンス
をくみ取ることを心掛けていたとい
う。現場と建物の声に耳を澄ませ、
発注者の要望を繊細に感知して双
方に翻訳するように伝える。杉山工
事長の流儀が感じられた。「清水建
設には大工のDNAが受け継がれて
います。以前からその精神を自分な
りのやり方で生かすことのできる文
化財の仕事に携わってみたい。願
いが叶ったこの現場に全力で取り
組んでいきます」と話してくれた。